

R. マイレーダーの書簡にみる H. ヴォルフのオペラ《お代官様》 — O. グローエ宛 1895 年と 1896 年の書簡より —

梅 林 郁 子 *

(2018 年 10 月 23 日 受理)

Hugo Wolf's Opera *Der Corregidor* in Rosa Mayreder's Letters
to Oskar Grohe in 1895 and 1896

UMEBAYASHI Ikuko

要約

本稿は、フーゴー・ヴォルフのオペラ《お代官様》の台本作家ローザ・マイレーダーが、ヴォルフの友人であるオスカー・グローエに宛てた書簡より、マイレーダーがヴォルフを支えていた状況と、《お代官様》に関する考えを明らかにするものである。

ヴォルフは、《お代官様》をウィーンで初演したいと考えていたが実現はされなかった。その理由として、ヴォルフが宮廷歌劇場に楽譜を提出しなかったことが一因と考えられる。マイレーダーは書簡で、ヴォルフが台本だけでなく、楽譜も提出する必要がある旨述べているが、提出には至らなかった。最終的にマンハイムで行われた初演は、グローエの尽力が大きいですが、もしヴォルフがマイレーダーたちの助言に従っていたら、ウィーン初演は不可能ではなかったかもしれない。

また、マイレーダーは、当初から台本の冗長さについて述べていたが、初演後の短縮は、両者ともに満足のいく結果となったことから、マイレーダーの指摘の的確さが見て取れる。彼女は、ヴォルフが登場人物を音楽的に表現する方法も肯定的に評価しており、演奏に対するマイレーダーの批判的な意見と改良への提案は、ヴォルフや彼の音楽に対する温かな理解から出ていると考えられる。全体としてヴォルフは、様々な形で彼を支援した良きパートナーを得ていたのである。

キーワード：フーゴー・ヴォルフ、《お代官様》、ローザ・マイレーダー、オスカー・グローエ

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

1. はじめに

本研究は、フーゴ・ヴォルフ Hugo Wolf (1860-1903) 作曲によるオペラ《お代官様 *Der Corregidor*》(1895年作曲、1896年初演)を巡って、台本作家ローザ・マイレーダー Rosa Mayreder (1858-1938)のヴォルフに対する支援状況を明らかにするものである。

ヴォルフが、友人や家族などに宛てた書簡は、既に、ヴォルフ生誕150年にあたる2010年に国際フーゴ・ヴォルフ協会 Internationale Hugo Wolf-Gesellschaftの編集で Musikwissenschaftlicher Verlag より、全4巻で出版されている(但し、注釈巻となる第4巻のみ2011年刊行)。しかし、この書簡集は、ヴォルフが書いた書簡のみで構成されており、受け取った書簡は含まれていない。同様に、ヴォルフの自筆書簡を数多く保管しているウィーン市庁舎図書館 Wienbibliothek im Rathaus にも、ヴォルフ宛ての書簡はほとんど残されていない。ヴォルフ宛ての書簡が大変少ない理由としては、単にヴォルフが受け取った書簡を取っておかなかったのかもしれないし、保管してあったけれども、晩年の長い入院生活の間、あるいは死後に処分されてしまったのかもしれないなど、様々な推測は可能だが想像の域を出ない。いずれにせよ、現存するヴォルフ宛ての書簡数の少なさから、ヴォルフの記した書簡を読めば発信した内容はわかるが、何に対してなのか、あるいはその返事はどうであったかなどは、不明確なことが多い。

一方でヴォルフは、作曲をし、演奏会を開催し、楽譜を出版するといった音楽的活動を、当然ひとりでこなしたわけではなく、それぞれの状況に応じて、彼の周囲の多くの友人や知人たちが、精神的に、或いは物質的・金銭的に彼を支えていた。そして、ヴォルフは彼らからも多くの書簡を受け取ったであろうが、残念ながら、先に述べたように彼宛てとして残されている書簡の数は少ない。しかし幸いにも、マイレーダーとヴォルフの友人で支援者であった判事オスカー・グローエ Oskar Grohe (1859-1924)との往復自筆書簡が、ウィーン市庁舎図書館に残されており、グローエは《お代官様》初演の実現に尽力した人物でもあったことから、二人の書簡には《お代官様》に関する話題が豊富に取り上げられている。

そこで、ヴォルフの周囲の人々が作品の成立に関与した状況を明らかにするという枠組みのなかで、本稿では二人の往復書簡より、ヴォルフが《お代官様》を作曲し、初演を終えた後までの期間、つまり1895年と1896年に、マイレーダーがグローエに宛てて記した書簡を考察対象として、マイレーダーの台本や音楽に関する考えと、ヴォルフを支えていた状況を明らかにする。

2. 先行研究

「1. はじめに」で述べたように、本研究は、ヴォルフの友人・知人たちの作品成立に対する支援・関与研究の枠組みのなかで行われるものである。そのため、本項では、この観点に関連する先行研究を以下に記す。

まず、支援者に関する全体的な論考としては、イレーネ・ズヒー Irene Suchy の著作 (Suchy

2010) が挙げられる。彼女はヴォルフの交友関係を広く取り上げ、友人・知人たちが後援者 Mäzen(-in) として行った支援や、彼らが築いた支援のネットワークを論じている。次に、友人・知人たちの個別の支援・関与の状況について、高木彩也子は、特にヴォルフが十代後半に受けた支援の状況を、書簡などを基に検討し、この時期にヴォルフと強い関わりを持った作曲家 アーダルベルト・フォン・ゴルトシュミット Adalbert von Goldschmidt (1848-1906) についてと、ヴォルフの作品が彼から受けた影響を論じている (高木 2012、2013、2014)。同様に筆者も、1894年にヴォルフと恋愛関係にあった歌手フリーダ・ツェルニー Frieda Zerny (1864-1917) について、ヴォルフの創作における関与の状況を (梅林 2012、2013)、また、1890 年以降、ヴォルフの友人・支援者となったグローエが、アマチュアながら作曲したリートについてヴォルフが述べた言葉から、彼の芸術に対する理念を考察してきた (梅林 2014) ¹。

そもそも、このように、ヴォルフと彼を取り巻く周囲の人々との交流について、客観的な研究が進められるようになった土台としては、「1. はじめに」でも述べた書簡集 Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft (Hrsg.) 2010、2011 の存在が大きい。ヴォルフの書簡は元々、宛先の人物別に刊行されていたのだが、この書簡集により、ようやく時系列で全体を見通すことができるようになったからだ。ヴォルフの人となりについては、ヴォルフの友人・知人が生きていた時代に、彼らへのインタビューも含めて執筆されたエルンスト・デチャイ Ernst Decsey (1870-1941) やフランク・ウォーカー Frank Walker (1907-1962) の評伝 (Decsey 1903 ~ 1906、1921、Walker 1951) の影響が非常に大きく、現在に至っても、このなかで形成されたヴォルフ像が強い影響を及ぼしているという印象は免れない。もちろん、このような評伝は、現在ではもう知ることのできない貴重な情報を含む反面、特にデチャイの評伝では、時代的な背景により、客観性に疑問が残る部分も散見される。このようななか、ヴォルフの書簡集の注釈を記したヴォルフ研究者レオポルド・スピッツァー Leopold Spitzer (1942-) によって、書簡の引用を多く取り入れた評伝が 2003 年に刊行された後、書簡集などの資料を基に、ヴォルフと周囲の人々の在り方を再考する 2010 年辺りからの研究動向は、ヴォルフ研究の新たな展開を示すものとなっている。

3. マイレーダーとグローエの人物像、及び往復書簡の情報

本項では、マイレーダーとグローエの人物の概略を述べ、その後、二人が交わした往復書簡と、本稿で扱う対象書簡の情報について記す。

¹ 関連して筆者は、アントン・ブルックナー Anton Bruckner (1824-1896) の弟子であり、秘書であったフリードリヒ・エックシュタイン Friedrich Eckstein (1861-1939) が、ブルックナーを経済的に支援すると共に、経済的な見返りなく仕事を手伝った状況などについても研究を行った (梅林 2017、2018)。エックシュタインはヴォルフの友人でもあり、彼に対しても経済的な支援を行っている。

3. 1. マイレーダーとグローエの人物像

本研究で考察対象とする書簡の書き手であるマイレーダーは、文筆活動を行うと共に、画家としても知られていた。また、1893年からは「一般オーストリア女性協会 Allgemeiner Österreichischer Frauenverein」の副会長を務め、後には「平和と自由のための国際女性連合 Internationale Frauenliga für Frieden und Freiheit」の会長となった女権論者でもあった。ヴォルフと直接に関わることであったきっかけは、このうちの文筆活動の部分で、『お代官様』の台本作者としてである。ヴォルフは、ペドロ・アントニオ・デ・アラルコン Pedro Antonio de Alarcón (1833-1891) のスペイン語の小説『三角帽子 *El sombrero de tres picos*』(1874) の独訳『三角帽子 *Der Dreispitz*』(1886) を読んでオペラ・ブッファを作曲したいと考え、これを受けて、友人のユリウス・マイレーダー Julius Mayreder (1860-1911) の義姉ローザ・マイレーダーが台本を制作した。これが1890年であったとされるが、ヴォルフはこの台本を一読するとすぐに却下した。しかし、1894年末にこの台本に再び目を通したヴォルフは、今度はすっかり気に入ってしまい、すぐに作曲に取り掛かったのである。マイレーダーと音楽の関わりについては、歌とピアノの教育を受けていたこと、ヴァグネリアンであったことが指摘されているが、オペラの台本制作については、最終的に《お代官様》のみとなった(Hilmar 2007:283-284)²。

一方、マイレーダーと書簡をやりとりしたグローエは、アマチュア作曲家であるが、本業はマンハイム大侯爵領の裁判所判事で、後にはフィリップスブルクで上級裁判所判事となった人物である。しかし、目を患って早期退職した後は、ヴォルフだけでなく、リヒャルト・シュトラウス Richard Strauss (1864-1949) やヴィルヘルム・フルトヴェングラー Wilhelm Furtwängler (1886-1954) らの音楽活動の他、演劇についても多大な支援を行った。グローエとヴォルフの出会いは、1890年である。この年の1月22日、『ミュンヘン一般新聞 *Münchener Allgemeine Zeitung*』に、ピアニストで音楽関係の文筆家でもあったヨーゼフ・シャルク Joseph Schalk (1857-1900) によるヴォルフのリートに関する記事「新しいリート、新しい生命 *Neue Lieder, neues Leben*」が掲載された。これを読んだグローエは、ヴォルフの作品に興味を惹かれ、同年4月にヴォルフに宛てて手紙を書き、文通が始まったのである。やがて10月には、ヴォルフがマンハイムに住むグローエを訪れて、さらに交流が深まることとなった(ibid. 154)。

こうして、マイレーダーとグローエは、それぞれ1890年頃からヴォルフと交友関係を持ったが、両者がどのようにして直接知り合うに至ったのかについては定かではない。しかし、ヴォルフがグローエに宛てた1895年1月18日付の書簡で、「ローザ・マイレーダーさんは、私の数年来の知り合いで、天才的な女性³」(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft (Hrsg.) 2010, 2:553. グローエ宛書簡 1895年1月18日付) だと紹介していることから、この時点では面識はなかったと考えられる。

² ヴォルフは1897年に新たなオペラ《マヌエル・ヴェネガス *Manuel Venegas*》(未完)に取り掛かろうとし、当初はマイレーダーの台本に作曲しようと考えていた。しかしその後、先史学者モーリッツ・ヘルネス Moriz Hoernes (1882-1917) の台本に変更した。この詳細は、Jestremski 2011:586-588を参照されたい。

³ Frau Rosa Mayreder, eine, mir seit Jahren bekannte, geniale Frau, ...

3. 2. 往復書簡に関する情報

このように、マイレーダーとグローエが直接に出会ったきっかけや日時は不明だが、ウィーン市庁舎図書館に所蔵されている往復書簡は 1895 年 9 月 23 日に始まっているので、少なくとも二人が直接に出会ったのは、1 月 18 日からこの日までのいつか、ということになる。そして、所蔵されている最後の書簡の日付は 1918 年 12 月 15 日であるので、以降約 24 年間にわたって文通の記録が残されていることとなる。次の【表 1】は、ウィーン市庁舎図書館所蔵の年毎の書簡数をまとめたものである。

【表 1】マイレーダーとグローエの往復書簡数内訳⁴

年	書簡数			年	書簡数		
	全体	M ⇒ G	G ⇒ M		全体	M ⇒ G	G ⇒ M
1895	7	3	3	1904	9	7	2
1896	30	15	15	1905	8	3	5
1897	13	4	9	1906	9	4	5
1898	5	3	2	1907	5	2	3
1899	12	6	6	1909	1	1	0
1900	9	4	5	1911	1	1	0
1901	6	3	3	1913	2	0	2
1902	9	4	5	1918	1	1	0
1903	9	4	5	不明	1	0	1
				計	136	64	71

この表は、所蔵されている書簡数の内訳なので、実際にはもっと多くの書簡がやりとりされていた可能性はある。しかし、数としては《お代官様》が上演された 1896 年がグローエ宛、マイレーダー宛相互に 15 通ずつで計 30 通と最も多い。【表 2】は、ヴォルフが《お代官様》の作曲を始めた 1895 年と初演が行われた 1896 年に、マイレーダーがグローエに宛てた書簡の一覧であるが、このうち、本稿で内容を考察する、《お代官様》に関して記述がある書簡は番号に丸を付している。書簡は全部で 18 通あり、うち 14 通の書簡に《お代官様》についてが記されている。

⁴ 【表 1】に記載のない年は、所蔵されている書簡がないことを表している。また、書簡数の M ⇒ G はマイレーダーからグローエ宛て、G ⇒ M はグローエからマイレーダー宛てを示す。

【表2】1895年と1896年にマイレーダーがグローエに宛てた書簡一覧

番号 ⁵	記入場所	日付	Interne-ID-Nr. ⁶	番号	記入場所	日付	Interne-ID-Nr.
4	Plankenberg	1895.10.15	LQH0121671	⑩	Wien	1896.05.31	LQH0121694
②	Wien	1895.11.24	LQH0121672	⑪	Wien	1896.06.11	LQH0121695
③	Wien	1895.12.30	LQH0121674	⑫	Wien	1896.06.12	LQH0121696
④	Wien	1896.01.04	LQH0121676	⑬	Wien	1896.06.17	LQH0121697
⑤	Wien	1896.01.18	LQH0121677	⑭	Wien	1896.07.13	LQH0121699
⑥	Wien	1896.01.23	LQH0121679	45	Ranten bei Murau	1896.08.21	LQH0121700
⑦	Wien	1896.04.14	LQH0121691	46	不明	1896.09.30	LQH0121701
⑧	不明	1896.04.29	LQH0121692	⑰	Wien	1896.11.21	LQH0121702
⑨	不明	1896.05.28	LQH0121693	48	不明	1896.12.19	LQH0121703

4. 《お代官様》作曲から初演・再演までの流れ

本項では、マイレーダー書簡の背景として、ヴォルフが《お代官様》を作曲してから初演を経て、再演に至るまでの概略を述べておきたい。

オペラ台本については、1894年12月30日に、ヴォルフが友人のフーゴー・ファイススト Hugo Faisst (1862–1914) やツェルニーに宛てた書簡 (Internationale Hugo Wolf- Gesellschaft (Hrsg.) 2010, 2:534, 536) により、ヴォルフが少なくとも年末には、マイレーダーの台本を入手したことがわかっている⁷。この台本に基づき、ヴォルフは、1895年に入ると作曲に取り掛かり⁸、1895年7月にはピアノ伴奏版楽譜を最後まで書き上げた。そして同月中にオーケストレーションに取り掛かり (Jestremski 2011:486-487)、遅くとも12月30日までには完成させた (Walker 1992:388) のである。

この間グローエは、ヴォルフが作曲に専念できるよう、他の友人たちと共に金銭的な支援を行っただけでなく (ibid.:374)、《お代官様》の初演をする場としてマンハイムの大公宮・国立劇場 Großherzogliches Hof- und Nationaltheater を選び、その支配人アウグスト・バッサーマン August Bassermann (1847–1931) と交渉も行った (Hilmar 2007: 155)。その甲斐あって、1896年6月7日同劇場にて初演を迎え (Jestremski 2011:513)、初日は成功裡に終わった。しかし、10日に行われた初演2日目の評価が芳しくなかったため、さらなる上演には繋がらなかった

⁵ 番号に丸印が付されている書簡は《お代官様》について記述があり、見え消し線が引かれている書簡は記述が無いことを表す。

⁶ Interne-ID-Nr. は、書簡が所蔵されているウィーン市立図書館のウェブサイトで、各書簡に付されている識別記号を表す。

⁷ いずれの書簡にも、台本作者の名が記されていないが、状況から鑑みてマイレーダーと考えられる。

⁸ ヴォルフが《お代官様》に取り掛かった正確な月日はわからないが、3月3日のツェルニー宛て書簡 (Internationale Hugo Wolf- Gesellschaft (Hrsg.) 2010, 2:578-579) に作曲に関する記述があり、これが文書に残された最初の記録と指摘されている (Jestremski 2011:486)。

(Walker 1992:401-404)。その後、翌 1897 年 3 月まで、短縮や改変を行い、1898 年 4 月 29 日にシュトラスブルク（現・フランスのストラスブール）の市立劇場 Stadttheater では、この改訂版で再演にこぎつけたのである（Jestremski 2011: 490-491,514）。

5. 《お代官様》に関する書簡内容の考察

以下、マイレーダー書簡より《お代官様》の「初演に至るまでの道のり」、「台本の短縮」、「音楽に対する意見」の三点を主眼として内容を考察する。

5. 1. 初演に至るまでの道のり

《お代官様》は、最終的に 1896 年 6 月 7 日にマンハイムで初演されたが、実現までの道のりは楽ではなかった。ヴォルフは、まだピアノ伴奏版を作曲しているうちから、ウィーンでの初演を強く望み、後にはベルリンでも良いと考えた（Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft (Hrsg.) 2010, 2:663, 673）。ベルリンでの可能性は、当時王立宮廷歌劇場の楽長であったカール・ムック Karl Muck (1859-1940) によってすぐに断られてしまったが、ウィーンには期待が持てた。これはマイレーダーからもたらされた情報に拠るもので、彼女はウィーン宮廷歌劇場の楽長ヨハン・ネボムク・フックス Johann Nepomuk Fuchs (1842-1899) が、「もし、テキストが幾分かでも筋が通っているなら、疑いなく上演されるでしょう。⁹」と述べたと報告した（Walker [1951] 1992:388）ことになっている。しかし、グローエ宛のマイレーダー書簡では、次のように記述されている。「ウィーンでの初演への見込みは、不利ではありません。つまり、私がこれについて知っていることの全ては、私の義弟に対する楽長フックスの発言に集約しています。それはこのような内容です。『もし、ヴォルフがオペラを提出し、そしてテキストが幾分かでも筋が通っているのなら、それは疑いなく上演されるでしょう。』（疑いなく、を強調して話していました）。もっとも、今年に関しては、もう全く希望はないように思われます。なぜなら、オーケストレーションが終わるまでには、おそらく 1 月になるだろうからです。¹⁰」（グローエ宛書簡 1895 年 11 月 24 日付）。実際のオーケストレーションは、マイレーダーの読みよりも若干早く終わり、ヴォルフは 1895 年 12 月 30 日にウィーン宮廷歌劇場総監督のヴィルヘルム・ヤーン Wilhelm Jahn (1835-1900) に総譜を見せようとした。しかし面会は叶わず、彼の秘書からは、ヴォルフが「作品を最も良い形で提出するべきである。それはそうと、もしそれが受理されることになったとしても、今シーズンにはもう、上演はされないだろう。¹¹」（Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft (Hrsg.) 2010, 3:5. ハインリヒ・ポトベシュニグ Heinrich Potpeschunigg (1847-1932) ¹² 宛書簡

⁹ If the text is only half reasonable, ... it will unquestionably be performed.

¹⁰ Die Aussichten auf eine Premiere in Wien sind nicht ungünstig. Das heißt, Alles, was ich darüber weiß, summiert sich in eine Äußerung des Hofkapellmeisters Fuchs meinem Schwager gegenüber. Sie lautete: "Wenn Wolf eine Oper einreicht, und der Text ist nur halbwegs vernünftig, so wird sie unbedingt aufgeführt" (unbedingt mit Nachdruck gesprochen). Allerdings, für dieses Jahr scheint gar keine Hoffnung mehr zu sein. Denn es wird wohl Januar werden, bis die Instrumentierung fertig ist.

¹¹ ... ich soll mein Werk in optima forma einreichen. Übrigens würde es in dieser Saison nicht mehr aufgeführt werden, falls es angenommen werden sollte.

1896年1月3日付)と伝えられたのである。

さて、先のマイレーダー書簡をもう一度読み直すと、まず、この話は義弟ユリウスからの伝聞であることがわかる。しかもフックスがオペラの上演について述べている条件は「ヴォルフがオペラを提出すること」と「テキストの筋が通っていること」の二点であり、さらにマイレーダーは現実を見据え、今シーズンの上演の可能性について否定的な見解を述べている。また宮廷歌劇場の秘書も「最も良い形の楽譜」を要求している。しかし、ヴォルフは楽譜を提出せず、翌1896年2月4日、ウィーン宮廷歌劇場に印刷された台本のみを提出したのである。宮廷歌劇場の監督たちは、これを検討するために専門家を招集したが、意見を求められたのは批評家のヴィルヘルム・フライ Wilhelm Frey (1826-1911)であった。彼はヨハネス・ブラームス Johannes Brahms (1833-1897)の音楽を擁護する、ヴォルフとは正反対の立場を取っており、1890年には、ヴォルフのリートの上演を阻んだ人物であった。彼が「全体は(中略)オペレッタの様式で考えられ、構想されており、私の考えでは、宮廷歌劇場の舞台にはそぐわない。¹³⁾」と述べたことにより、《お代官様》のウィーン宮廷歌劇場での上演の可能性は閉ざされてしまった(Grasberger (Hrsg.) 1960:71)。そして、ようやくヴォルフがフックスの前でオペラを試演してみせたときには、もう年の暮れ12月9日になっていたのである(Jestremski 2011:491)。

マイレーダーが義弟経由でフックスから聞いた二点の条件、特にオペラの提出についてが、ヴォルフに正しく伝わっていたかは不明だが、秘書から作品を最も良い形で提出するよう自ら聞いており、またウィーンでの上演を切望していたにも関わらず、なぜヴォルフは1896年末まで、ウィーン宮廷歌劇場関係者に彼の音楽を聴かせようとしなかったのだろうか。ウォーカーは、ヤーンの秘書に門前払いを食らわされた後のヴォルフの気持ちとして、「私の作品は、それには充分すぎるほどだ。監督たちが私のところに来るべきで、私が彼らのところに行くのではない。」という言葉を用いている(Walker 1992:389)¹⁴⁾。この言葉は、文脈から書簡を英訳して引用したと考えられるが日付の記載が無く、筆者は原文を確認できなかった。この文章をヴォルフが書簡に書き残しているとしても、彼の本心だったのか、それとも、歌劇場関係者に曲を提示して拒否されることを恐れたための強がりなのか、さらにまた別の理由があったのかはわからない。しかし、マイレーダーの言葉が、ヴォルフに正しく伝わっていたら、或いはヴォルフがマイレーダーの言葉や秘書の助言を真摯に受け止めて従っていたら、ウィーンでの上演の道りはもう少し円滑に進んだかもしれない¹⁵⁾。

ウィーンでの初演の可能性が潰えた後、シャルクの尽力でプラハ、そしてグローエの側から

¹²⁾ ヴォルフの友人。グラーツの歯科医であったが、また優れたピアニスト兼作曲者でもあった。

¹³⁾ Das Ganze... ist im Genre der Operette gedacht und angelegt und eignet sich nach meinem Dafürhalten nicht für die Bühne der Hofoper.

¹⁴⁾ My work is too good for that. The directors must come to me, not I to them.

¹⁵⁾ ヴォルフの念願であったウィーンでの上演計画は、その後も順調に進まず、ようやく彼が亡くなってから約1年後の1904年2月18日に、ウィーン宮廷歌劇場で行われた。指揮者は、かつてウィーン市立音楽院でヴォルフの同級生であり、当時ウィーン宮廷歌劇場芸術監督の地位にあったグスタフ・マーラー Gustav Mahler (1860-1911)であった(Jestremski 2011:515)。

はマンハイムでの上演の可能性が浮上してきた。この件について、マイレーダーは次のように述べている。「私自身はまた、マンハイムについてとても良いと思っています。なぜなら彼〔ヴォルフ〕には、その地に温かな友人がおり、聴衆は彼を知っており、守ってくれるからです。¹⁶（文中の〔 〕内は、筆者が挿入）」（グローエ宛書簡 1896 年 1 月 18 日付）。最終的にはマンハイムでようやく初演の運びとなるが、それもヴォルフとマンハイムの劇場、及び歌手の意向がなかなか一致せず、何度も延期された後で、ようやく実現されたのだった。初演のわずか 10 日前のマイレーダーの書簡には、以下のように書かれている。「私が来週、マンハイムに行くのか、行かないのか — このことは、私には今日になってもまだ判然としないのです。私のこれまでの人生が、私に待つことを訓練したのは幸いです。私は今それを役立たせることができます。¹⁷」（グローエ宛書簡 1896 年 5 月 28 日付）。ウィーンでの初演に係る一件といい、マンハイムの初演といい、このマイレーダーの言葉からも、ヴォルフと共に仕事をすることは、かなり忍耐力のいる作業であったと考えられるだろう。

5. 2. 台本の短縮

台本の短縮に関するマイレーダーの書簡を考察する前に、まず『三角帽子』の物語のあらすじを、簡潔に述べておきたい。舞台は、1804 年のアンダルシア地方である。人の好い粉屋のティオ・ルーカス Tio Lukas には、フラスキータ Frasquita という美しい妻がいるが、年取った村の代官は、メルセデス Mercedes という妻がありながらもフラスキータに横恋慕している。代官は、彼女を手に入れようと策略を巡らし、ティオの留守に、川に落ちて濡れてしまったと言いながら家にやって来て、服を脱ぎながらフラスキータに言い寄る。しかし、彼女は代官をピストルで脅し、ショックで具合が悪くなった彼を置き去りにして家から逃げる。ティオが家に戻ると、服を脱いだ代官がベッドで寝ていたため、フラスキータが浮気をしたと勘違いし、代官の服を着てメルセデスの下に出掛ける。目が覚めた代官は、ティオの服を着て後を追うが、自分の家に着くと使用人たちに、代官は既に帰宅しているので、彼の名を騙った偽物だと嫌疑をかけられ、家に入れない。そこにメルセデスが現れ、フラスキータの潔白を証明し、代官を諫め、全てを丸く収めるのである。オペラ《お代官様》の台本は、この物語を基に、全 4 幕で仕上げられている。

1895 年 7 月から 12 月にかけて、《お代官様》のピアノ伴奏用楽譜を書き上げたヴォルフは、その後いよいよオーケストレーションに取り掛かっており、この時期の書簡では、第 4 幕の短縮についてが話題となっている。第 4 幕は、代官がティオの服を着て帰宅するところから始まるが、この幕の短縮は、当初からマイレーダーがヴォルフに助言をしていた事項であった。マイレーダーは次のように述べている。「私はドキドキしながら、第 4 幕において話し合われて

¹⁶ Ich selbst wäre wohl auch sehr für Mannheim, weil dort er warme Freunde besitzt und ein Publikum das ihn kennt und schützt.

¹⁷ Werde ich nächste Woche nach Mannheim kommen oder nicht – das steht für mich noch heute unleserlich in den Sternen geschrieben. Es ist ein Glück, daß mich mein bisheriger Lebenslauf auf das Abwarten dressirt hat: ich kann es jetzt wohl brauchen.

いる短縮を提案するために、きっかけとして校正用ゲラ刷りを用いました。¹⁸⁾(グローエ宛書簡 1895年11月24日付)。このオペラの台本上の欠点として、先行研究では「特に第4幕で——いわゆるオペラの休憩に起きたできごとを物語ることが、あまりにも多く、舞台上で、つまり観客の目の前で起きることがあまりにも少なすぎる。¹⁹⁾(Werba 1971:257)といった評価がされている。これは、恐らく初演後の改訂版に対しての批評であることを含めると、初版ではさらに大きな問題点であったことが窺える。マイレーダー自身、オーケストレーション前の時点で既に、第4幕の説明方法の冗長さと、とりわけ繰り返しに難があることはわかっており(グローエ宛書簡 1896年7月19日付)、それ故、オーケストレーションの段階で、ヴォルフに短縮を提案したのであろう。しかし、ヴォルフは「私の音楽は、どんな削除にも全く我慢できません。なぜなら、そこでは全てがいずれにしてももう、きっちりと計られているからです。²⁰⁾(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft (Hrsg.) 2010, 2:758-759. マイレーダー宛書簡 1895年11月8日付)ときっぱりと拒否し、マイレーダーは「全ては、何の役にも立ちませんでした。²¹⁾(グローエ宛書簡 1895年11月24日付)と記すことになった。

こうして初演は、短縮せずに行われたが、初演直後にヴォルフの気持ちは大きく変わった。マイレーダーは「もしかするとあなたは、ヴォルフが第4幕で、ある変更を企てる決心をしたことを、バッサーマン博士を通じて、知らされたかもしれません。彼は私に、その点で、完全に自由な裁量を任せました。²²⁾(グローエ宛書簡 1896年7月19日付)と書いている。バッサーマンは、初演2日目の失敗の一因が、作品の冗長さにあると考えた。「彼は、ヴォルフのオペラは、今シーズン再び上演されることは有り得ないと決め、もし秋に再演されるならば、短縮が必要であろうと述べた。²³⁾(Walker 1992:404)のである。台本短縮を全権委任されたマイレーダーは、大幅な変更に取り掛かる。「こうして、台本における第4幕全体は、16ページのみとなり、この短縮は、およそ1と1/2ページに及びました。²⁴⁾(グローエ宛書簡 1896年7月19日付)。さらに彼女はこの短縮について、「私は音楽的に、ほぼ何も作り替えることになる必要がなかったことを、とても嬉しく思いました。(中略)言うまでもなく、これにより、最後の道徳的な性格が除去されることはありません。²⁵⁾(グローエ宛書簡 1896年7月19日付)と述べている。このマイレーダーの見解に対し、ヴォルフも「この削除はとても適切であったので、音楽的な流れは全く妨げられず、ほんの些細な音楽的変更が起こるだけだ。²⁶⁾(Internationale

¹⁸⁾ Ich habe nämlich die Korrekturbögen als Anlaß benützt, um die besprochene Kürzung im 4. Akte vorzuschlagen – mit Herzklopfen, ...

¹⁹⁾ ... es wird – vor allem im vierten Akt – zuviel von dem erzählt, was sich sozusagen in den Pausen der Oper zugetragen hat; auf der Bühne, vor den Augen des Zuschauers ereignet sich zu wenig; ...

²⁰⁾ Meine Musik verträgt absolut keine Striche, denn da ist Alles so wie so schon auf's knappste bemessen.

²¹⁾ Es hat aber Alles nichts genützt.

²²⁾ Vielleicht haben Sie indessen durch Dr. Bassermann erfahren, daß Wolf sich entschlossen hat, eine Änderung im 4. Akt vorzunehmen. Er hat mir dabei völlig freie Hand gelassen; ...

²³⁾ He had decided that Wolf's opera could not be performed again in that season and spoke of cuts that would be necessary if it were to be revived in the autumn.

²⁴⁾ Da der ganze 4. Akt im Leytbuch nur 16 Seiten zählt und diese Kürzung ungefähr anderthalb Seiten beträgt, ...

²⁵⁾ ... ich habe es so glücklich getroffen, daß musikalisch fast nichts umgearbeitet zu werden braucht. ...Freilich wird dadurch der moralistische Charakter des Schlusses nicht behoben; ...

Hugo Wolf-Gesellschaft (Hrsg.) 2010, 3:160. 出版業者カール・ヘッケル Karl Heckel (1868–1923) 宛書簡 1896 年 6 月 28 日付) としている。

こうしてみると、マイレーダーの提案は非常に正しく、初演前に修正した方が良かったのではないかとも思えるが、いずれにしても、物語においても、音楽においても流れを壊さなかったとマイレーダー、ヴォルフ双方が合意できる形での台本の短縮は、マイレーダーがヴォルフの音楽を非常に良く理解していたからこそ、実行できた作業であったと言える。それでは、マイレーダーはヴォルフの音楽をどのように評価していたのであろうか。

5.3. 音楽に対する意見

マイレーダーにとって、オペラの台本執筆は初めての経験であり、彼女は必ずしも自分の台本が完璧であるとは考えていなかったが、ヴォルフの音楽については非常に肯定的に評価していた。特に初演から一ヶ月が過ぎた頃の書簡に、彼女は《お代官様》の音楽や演奏に対する意見を記している。「私は、最初あまりにも、音楽の圧倒的な印象に氣を取られていました。しかし、まさにそこから、私は台本の・・・な技術不足について、ある種の慰めを得ています。²⁷ (文中の「・・・」は解読不能)」(グローエ宛書簡 1896 年 7 月 19 日付)。続けて彼女は、特にオペラについて「ある作品を、二度、三度と聴くやいなや、観客にとって、内容の展開に関する興味は消えてなくなります。しかるに、人格やあらゆる繊細さに関する興味は、真に芸術的な性質の作品に対して不変に違いありません。ヴォルフの音楽は、人格を非常に深め、魅力的で、芸術的な細部に富んでいます。²⁸」(ibid.) と述べ、聴き手の物語の進行に関する興味は一時的なものであるが、人間性に関する興味は後にまで残り、ヴォルフはその音楽的な表現に長けている旨述べている。

このように、マイレーダーはヴォルフの音楽を肯定的に評価する一方で、初演で代官役を演じたハンス・リューディガー Hans Rüdiger (1862–1937) については批判的な見解を述べている。「リューディガー氏は確かに、・・・よりも計り知れないほど有能なメンバーであるにも関わらず、私にとっては、代官の・・・を新たに配役することがフラスキータの配役よりも、とても重要に思われます。残念ながら、彼はこの役の性格を、完全につかみ損ねていました。²⁹ (文中の「・・・」は解読不能)」(ibid.)。

マイレーダーは、タイトルロールである代官の人物像について、「内容の展開が全く状況のもつれのみである、まさにその状況が、代官という人物の激しく、真剣な面を強調して描写す

²⁶ Diese Striche sind so angebracht, daß der musikalische Fluss keinerlei Störung erleidet u. nur eine ganz unerhebliche musikalische Aenderung bedingt sein wird.

²⁷ Ich bin bin [sic] anfänglich zu sehr unter dem überwältigenden Eindruck der Musik gestanden. Aber gerade daraus schöpfe ich einen gewissen Trost über die ... technischen Mängel des Leytbuches.

²⁸ ... ihr Interesse an der Handlung verliert sich für den Zuschauer, sobald er ein Werk ihr zweite oder dritte Mal gehört hat; hingegen ihr Interesse an den Charakteren und an allen Feinheiten müsste einem Werke von wirklich künstlerischen Qualitäten gegenüber beständig. Die Musik Wolf's hat die Charaktere so außerordentlich vertieft, sie ist so reich anentzückenden, künstlerischen Details, ...

²⁹ Sehr wichtig würde mir eine Neubesetzung der Corregidor... erscheinen, wichtiger als diejenige der Frasquita, obgleich Herr Rüdiger gewiß eine unendlich tüchtigere Kraft ist als ... Aber leider hat er den Charakter der Rolle völlig vergriffen.

ることを望ましいものとしています。³⁰⁾ (ibid.) と述べ、代官にまつわる可笑しさは、代官の目論見がことごとく失敗するところにあり、彼の人物自体がユーモラスであってはならないと考えていた。「彼は、絶対に横柄で、もったいぶった人物でなければなりません。彼の可笑しさは意図しないものであり、彼が陥る状況に伴って、彼の威厳が常にこうむる、その対比にこそまさにあるのです。³¹⁾ (ibid.)。つまり、マイレーダーは、彼女の考える代官の人物像とヴォルフの音楽的表現は合っているが、リューディガーの演奏や演技には難があると考えたのである。ここからさらに一步踏み込み、マイレーダーは、グローエに意見を求めている。「この見地のもと、代官にはテノールブッフォではなく、ヘルデンテノールが充てられるのは、不可能だと思いませんか？³²⁾ (ibid.)。

前項で述べたように、初演の後、マイレーダーはヴォルフからの依頼を受け、また自身も提案していたように第4幕の台本を短縮する。しかしそれだけでなく、物語の全体的な流れや、ヴォルフの音楽を変更せずに代官の人物像を理想に近付ける方法として、「代官役の演者が代官の人間性を理解する。つまり、滑稽な歌い方や演技をすることなく、彼を巡って起きる状況からユーモアを引き出す」と「代官役の演者の声種を変更する」の二点を提案することで、さらに演奏の側からも《お代官様》を改良しようと考えたのである。

6. まとめ

本稿は、ヴォルフのオペラ《お代官様》について、グローエ宛のマイレーダー書簡より、特に「初演に至るまでの道のり」、「台本の短縮」、「音楽に対する意見」の三点を主として内容を考察した。

まず、ヴォルフが当初願っていた《お代官様》のウィーン初演が実現なかった理由は、ヴォルフが宮廷歌劇場に楽譜を提出しなかったことが一因と考えられる。マイレーダーからは、楽長フックスより義弟を通じて得た情報として、台本の筋が通っていれば上演の可能性がある、とヴォルフに伝わっていたわけだが、マイレーダーは少なくともグローエには、ヴォルフが台本だけでなく、宮廷歌劇場に楽譜を提出する必要がある旨も述べている。これがヴォルフに伝わっていなかったとしても、ヴォルフ自身も歌劇場総監督ヤーンの秘書から、最良の形で楽譜の必要性を説かれていたわけで、楽譜の提出に至らなかった理由は不明である。最終的にマンハイムで行われた初演は、グローエの尽力が大きいが、もしヴォルフがマイレーダーの助言、あるいはヤーンの秘書の助言に従っていたら、ウィーン初演は不可能ではなかったかもしれない。

³⁰⁾ Gerade der Umstand, daß die Handlung eigentlich nur eine Situationsverwicklung hat, macht es empfehlenswerth, daß die leidenschaftliche, ernsthafte Seite der Corregidorgestalt in der Darstellung unterstrichen wird.

³¹⁾ Er müsste unbedingt eine hochfahrende, gravitatische Persönlichkeit sein und dürfte in seinem Auftreten ja nichts Spaßhaftes haben. Seine Komik ist eine unfreiwillige und besteht gerade in dem Kontrast, d(ie) seine Würde beständig mit den Situationen, in die er geräth, erleidet.

³²⁾ Halten Sie es unter diesen Gesichtspunkt(e)n für unmöglich, daß der Corregidor von einem Heldenenor statt von einem Tenorbuffo gegeben wird – ?

また、台本の短縮の件について、マイレーダーは、当初から台本の冗長さについて指摘しており、初演の後、ようやく短縮を決断したヴォルフに、マイレーダーがどれほど安心したかは想像に難くない。この短縮による改良は、マイレーダーもヴォルフも納得のいく結果となっていることから、マイレーダーの指摘の的確さや、彼女がヴォルフの音楽をどれほど良く理解していたかが見て取れる。ヴォルフの音楽に対する理解は、演奏に対する意見にも現れている。彼女はヴォルフが登場人物の人格を音楽的に表現する方法を、非常に肯定的に評価している。演奏に対する批判的な意見と改良への提案は、マイレーダーのヴォルフの音楽に対する理解ゆえと言えよう。

マイレーダーの助言や懸念は、直接、またはすぐにヴォルフに届かなかったものもあるが、彼女の意見はヴォルフや彼の音楽に対する温かな理解から出ており、全体としてヴォルフは、様々な形で彼の力になろうとする非常に良いパートナーを得ていたのである。マイレーダーやグローエのみならず、ヴォルフには多くの支援者があり、彼の作曲、作品の演奏や出版などに関与していた。しかし、一般的に音楽においては、作曲者を囲む人々が成立に向けて努力しなければ、歴史から消えてしまったかもしれないような作品があるにも関わらず、作曲者への支援や関与が形に残りにくいことから、彼らの活動の実際に関する研究は、十分に進んでいるとは言いがたい。本研究では、マイレーダー書簡を通じて、このような人々の、ヴォルフの作品に対する関与・支援の一端を明らかにできたと考えている。

付記

本稿は、平成 28 ～ 30 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「19 世紀ウィーンにおける音楽愛好家の活動 — F. エックシュタインの貢献と支援の状況」(研究課題番号 16K02241) による研究成果の一部である。

引用・参考文献

- ALARCÓN, Pedro Antonio de. 1882. ドイツ語訳, *Manuel Venegas*, Übers. von Franz Eyssenhardt. Stuttgart: Spemann.
- . 1981. ドイツ語訳, *Der Dreispitz*. Übers. von Hulda Meister. Stuttgart: Philipp Reclam jun. GmbH & Co. KG. (1. Auflage in 1886).
- アラロン・ペドロ・アントニオ・デ. 1990. 日本語訳, 『三角帽子』 会田由訳. 東京: 岩波書店. (初版は 1939 年)
- DECSEY, Ernst. 1903, 1904, 1906. *Hugo Wolf*. 4 Bände. Leipzig: Schuster und Loeffler.
- . 1921. *Hugo Wolf — das Leben und das Lied*. Berlin: Schuster und Loeffler. (デチャイ, エルンスト. 1966. 日本語訳, 『フー・ゴー・ヴォルフ 生涯と歌曲』 猿田恵; 小名木栄三郎訳. 東京: 音楽之友社.)
- GRASBERGER, Franz (Hrsg.) 1960. *Hugo Wolf. Persönlichkeit und Werk*. Wien: Österreichische Nationalbibliothek.
- HILMAR, Ernst. 2007. *Hugo Wolf. Enzyklopädie*. Tutzing: Hans Schneider.
- Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft (Hrsg.) . 2010, 2011. *Hugo Wolf. Briefe*. 4 Bände. Wien: Musikwissenschaftlicher Verlag.
- JESTREMSKI, Margret. 2011. *Hugo Wolf. Werkverzeichnis*. Kassel: Bärenreiter.
- SPITZER, Leopold. 2003. *Hugo Wolf. Sein Werk — Sein Leben*. Wien: Holzhausen Verlag.
- SUCHY, Irene. 2010. “„Das schofle Mäzenasspielen“ — Hugo Wolfs Wirtschaftsbiographie”. *Hugo Wolf. Biographisches. Netzwerk. Rezeption*. 104-125. Wien: Metroverlag.
- 高木彩也子. 2012. 「フー・ゴー・ヴォルフと彼の支援者たち — 1877 年の書簡をもとに」『愛知県立芸術大学紀要』42, 211-223.
- . 2013. 「フー・ゴー・ヴォルフの初期歌曲にみられる支援者: 作曲家アーダルベルト・フォン・ゴルトシュミットの影響: 1877 年から 1878 年にかけて」『愛知県立芸術大学紀要』43, 137-153.
- . 2014. 「フー・ゴー・ヴォルフの初期歌曲にみられるアーダルベルト・フォン・ゴルトシュミットの影響 — 1877 年の支

援に関する総合的考察」愛知県立芸術大学博士論文。

梅林郁子, 2012. 「フーゴ・ヴォルフの書簡研究 ― フリーダ・ツェルニー宛 1894年2月から6月まで」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』62, 59-73.

——, 2013. 「フーゴ・ヴォルフの書簡研究 その2: フリーダ・ツェルニー宛 1894年7月から1895年8月まで」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』63, 55-68.

——, 2014. 「オスカー・グロー作曲〈7月の夜〉を巡って― フーゴ・ヴォルフの芸術理念と創作」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』64, 101-113.

——, 2017. 「A. ブルックナーの音楽に対する F. エックシュタインの支援と貢献」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』68, 119-130.

——, 2018. 「S. セヒターを巡る音楽的系譜と A. ブルックナーの指導法 ― F. エックシュタイン著「音楽理論体系」序文の考察」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』69, 79-91.

WALKER, Frank. 1992. *Hugo Wolf. A Biography* (3rd ed.) (1st ed. 1951, New York: Knopf.). Princeton, NJ: Princeton University Press.

WERBA, Erik. 1971. *Hugo Wolf oder der zornige Romantiker*. Wien: Fritz Molden. (ヴェルバ, エリック, 1979. 日本語訳, 『フーゴ・ヴォルフ評伝 怒れるロマン主義者』佐藤牧夫; 朝妻令子訳, 東京: 音楽之友社.)